

戸田貞三と小山隆 — 家族人口学的研究を中心として —

清水浩昭

はじめに

戸田貞三と小山隆の家族研究については、今日まで、様々な議論が展開されてきている<sup>(1)</sup>。しかし、人口学研究の一分野になりつつある家族人口学との関連および家族の人口学的分析に焦点をあてて戸田と小山を論じたものは、ほとんどなかったように思われる。

そこで、小稿では、人口学の分野で提示された家族人口学の研究領域を紹介するとともに、戸田と小山の家族人口学にかかわる研究業績を検討してみたい。というのは、家族社会学者としての戸田と小山の研究業績のなかに、家族人口学的研究の展開方向を示唆する豊かな鉱脈が埋蔵しているように思えてならないからである。

一、家族人口学の研究領域

世帯と家族の人口学は、人口学のなかで体系化が最もおくられた研究部門の一つであり、人口学の標準的な教科書や概論書に世帯と家族に関する人口学を扱った独立の章がないのが一般的であった。人口学者が、世帯と家族に関心を示さなかったのは、彼らの分析の単位が個人にあり集団になかったからではなからうか。

ところが、最近、欧米諸国を中心にして世帯と家族の人口学に関する関心が急速に高まってきている。その背景には、世帯データの整備、コンピュータによる分析技法の発展と人口学的行動を決定する際の有力な単位として世帯に照準をあてて研究を展開することが増大してきた<sup>(2)</sup>ことがあるように思われる。

それでは、この家族人口学の研究対象として、どのような領域が考えられているのであろうか。

トマス・バーチは、(一)世帯、家族の構成——その国別および国内の地域的差異、(二)世帯、家族変動とライフサイクル上の変化との関連、(三)世帯、家族変動に与える人口学的(年齢構造、出生、死亡、結婚、離婚および移動のような人口過程)および社会経済学的決定要因との関連、(四)世帯、家族の差異とその変化に伴う社会経済的帰結(例えば、子供の世話の仕方、年齢および性的役割、世代間関係、老人世帯の孤立と依存)および(五)世帯と家族の構造とその変化に関する人口学的計量方法とモデルの開発を挙げている。

このトマス・バーチの提示した対象領域を、家族人口学の研究領域とすれば、戸田貞三と小山隆は、どのような領域を中心にして家族人口学的研究を展開してきたのであろうか。

ここでは、戸田と戸田の正統的な継承者といわれている小山の二人の家族研究者を対象にして彼らの家族人口学に関する研究業績を一べつしてみたい。というのは、戸田と小山は、わが国における家族人口学の祖と考えられるからである。

## 二、戸田貞三の家族人口学的研究

戸田貞三は、家族と人口との関連について、「多くの民族または国民社会において、将来その社会の成員となるべき者はそれらの民族または国民が構成する家族生活上の機能の一部たる子供の出生およびその扶養を通じて求められる。家族生活におけるこの種の機能実現の方法およびその消長は、一面にはそれらの家族を

構成する人々が属する民族または国民の人口量に重大なる関係を及ぼし、他面には民族または国民の質に大いなる影響を与える。それ故に近來人口問題ならびに国民保健問題を研究する人々は家族におけるこの機能を重視し、国民の人口の調節およびその優性的効果を家族生活を通じて実現せしめんとし、家族生活に関して次第に多くの注意をはらうようになった」と述べている。

しかし、戸田の家族と人口に関する大きな研究業績は、「家長的家族」制度下において、何故に、三世帯世帯が、支配的な家族形態となっていないのかを論じた点にあるように思われる。

というのは、「家長的家族」(世代的連続を志向している家族Ⅱ直系家族制)にあつては、祖父母、父母、世帯主夫婦あるいはその子供たちからなる家族が一つの家族で生活することが原則になっているにもかかわらず、大正九年の「国勢調査」をみると、直系の二世帯以下の家族が主流となつていたからである。戸田は、この理由を「親、子、孫三世帯以上の者が同一家族内に在り得る場合は、一般的にみるならば、各世代の間の年齢間隔の少ない場合(合)だけについてみても、母(父よりも母が年少者である場合)多く、したがって母とその子との年齢間隔は父とその子とのそれよりも小である」とその子たる年長の男の子とこの男の子とが同時に存在している場合でなければならぬ。しかしかくのごとき場合が多いか否かは第一には国民一般の平均初婚年齢の高低いかに規定せられ、第二には有配偶女子の出産率の大小によって規定せられ、さらに第三には国民一般の年齢別生存率のいかんによって

規定せられる<sup>(6)</sup>」としている。つまり、三世代世帯を形成するためには、初婚年齢の低さ、有配偶女子の出生率と長寿とが適合的に連関してはじめて成立するものであるとしたのである。

したがって、このような人口学的条件が達成せられていない場合には、「家長的家族」制度下においても直系の二世代以下の家族が主流を占めることがありうると考えたのである<sup>(7)</sup>。

### 三、小山隆の家族人口学的研究

小山隆も戸田貞三と同じように家族の人口学的研究にたいへん興味を示した研究者である。

しかし、小山が家族研究に人口学的視点を加えた意図は、家族がだれでも経験している事実であるが故に、研究者の主観的、独断的な見解をできるだけ排除し、研究における客観性を維持しようとしたことにある。

したがって、小山の家族の人口学的研究は、戸田と同様に官庁統計を使用しているが、分析の中心は、家系の人口学的分析、続柄構成、世帯規模、家族構成の変動過程に関する人口学的分析にあった<sup>(8)</sup>。しかし、人口移動・人口高齢化と家族構成との関連にも多大な関心を寄せていた。とりわけ、人口流出・人口流入と家族化の地域分析は、多くの家族研究者に影響を与えた分野である。小山は、昭和四〇年の「国勢調査」結果を用いて核家族的世帯の地域別類型化を試みた。その結果、わが国には、「若年型核家族的世帯」、「高年型核家族的世帯」と「中年型核家族的世帯」

とが存在していることを明らかにするとともに、「若年型核家族的世帯」は、東京都にその典型を見出すことができるものであり、この型は、若年層の人口流入によってもたらされたものであるとした。その対極をなすのが「高年型核家族的世帯」であり、その典型は、鹿児島県に見出すことができ、この型は、若年層の人口流出の影響によって現出したものであるとしている。これに対して「中年型核家族的世帯」は、山形県に典型を見出すことができるものであり、この型は、急激な社会変動の影響をあまり受けていない地域に存在しているものであるとした<sup>(9)</sup>。

### 結びにかえて

以上、家族人口学の研究対象を紹介しながら、わが国における家族人口学の源流となった戸田貞三、小山隆の研究業績を一つ一つしてきたが、戸田、小山ともトマス・バーチが提示した家族人口学的研究分野の大部分をカバーしていたといえよう。しかし、戸田と小山との家族人口学的研究における分析視角をみると、戸田が家族の変動過程を出生・平均初婚年齢・平均余命との関連で問題にしたのに対して、小山は、続柄構成、世帯規模の分析を通じて家族のもつ客観的事実を明らかにするとともに、人口移動・人口高齢化と家族変動との関連を明らかにしたところにある。このことは、戸田が家族の内部構造に視点をあてて家族の変動過程を人口学的に分析したのに対して、小山は、家族の変動過程を家族をとりまく社会・経済的条件、とりわけ人口移動・人口高齢化と

の関連で分析したところにあるということもできよう。

ともあれ、トマス・バーチの提示した分野が家族人口学の研究領域であるとすれば、私達は、戸田と小山が展開した家族の人口学的研究を統合化するとともに、彼らの研究を継承・発展させることが、わが国における家族人口学的研究の進展につながるのではなからうか。<sup>(10)</sup>

注

(1) 戸田貞三の家族論については、つぎのような研究がある。

喜多野清一、「日本の家と家族」、『大阪大学文学部紀要』、

第一巻、大阪大学文学部、一九六五年（喜多野清一、『家

と同族の基礎理論』、未来社、一九七六年、八五—一五九頁）。

宇野正道、「戸田家族理論における生活の視点」、『家族研

究年報』、第四号、家族問題研究会、一九七八年、三八—四

九頁。

喜多野清一、「解説——日本における家族社会学の定礎者

戸田貞三博士」、戸田貞三、『家族構成』（叢書名著の復興）、

新泉社、一九八二年、三八—四〇四頁。

小山隆の家族論については、つぎのような研究がある。

森岡清美、「日本の家族研究における家族問題」、家族問題

研究会編、『現代日本の家族動態・問題・調整』、培風館、一

九七四年、三四—三五七頁。

山室周平、「小山隆と家族問題研究会」、『家族研究年報』、

第一〇号、家族問題研究会、一九八四年三月、一一四頁。

老川寛、「家族社会学における小山隆」、『家族研究年報』、

第一〇号、家族問題研究会、一九八四年三月、五一—四頁。

清水浩昭、「家族構成の実証的研究」、『家族研究年報』、第

一〇号、家族問題研究会、一九八四年三月、一五—二二頁。

古谷昭、「家族問題の解決と家族社会学」、『家族研究年報』、

第一〇号、家族問題研究会、一九八四年三月、二二—二九

頁。

湯沢雅彦、「家族問題実践家としての小山先生」、『家族研

究年報』、第一〇号、家族問題研究会、一九八四年三月、三

〇—三三頁。

森岡清美、「小山隆における現実問題への関心」、『家族研

究年報』、第一〇号、家族問題研究会、一九八四年三月、三

四—三七頁。

山手茂、「家族問題と家族社会学の課題」、『家族研究年

報』、第一〇号、家族問題研究会、一九八四年三月、三八—

四〇頁。

老川寛、「小山隆の家族研究」、『明治学院論叢』、第四二九

・四三〇号、明治学院大学、一九八八年三月、三三—四一

二頁。

(2) アメリカでは、人口センサスのテーブ化とその販売化が急

速に進んできたといわれている。

(3) 出生（家族計画） 墮胎 結婚 移動のような人口学的行動

に対する意志決定の単位として個人よりも世帯に焦点をあてて研究を展開することが高まってきた。

- (4) Thomas K. Burch, "Household and Family Demography: A Bibliographic Essay", *Population Index*, April 1979, pp. 173—195.

- (5) 戸田貞三、『家族構成』、弘文堂、一九三七年（戸田貞三、『家族構成』、新泉社、一九八二年、一一頁）。

- (6) 戸田、『前掲書』、三三四頁。このような見解が、すでに、一九三〇年代後半に提示されていることに着目しておきたい。というのは、戸田の論文は、トマス・バーチの論文よりも四〇年以上も前に発表されたことになるからである。

- (7) この点に関する実証的な分析として、清水浩昭・池ノ上正子、「人口変動と世帯構成および世帯構造の変化——山形県藤島町の事例分析——」、『人口問題研究』、第四六巻第一号、厚生省人口問題研究所、一九九〇年四月を参照されたい。

- (8) これらの点については、小山隆著（家族問題研究会編）、『山間聚落の大家族——越中五箇山・飛騨白川村の実証的研究』、川島書店、一九八八年所収の論文と小山、「家族形態の周期的変化」、喜多野清一、岡田謙編『家——その構造分析——』、創文社、一九五九年、六七—八三頁を参照されたい。

- (9) 小山、「核家族的世帯の地域別類型」、『東洋大学社会学部紀要』、第九号、東洋大学、一九七一年三月、一一—一九頁。

- (10) 人口学の立場から家族人口学の動向を展望した論考とし

て、河野稠果、「家族人口学の展望」、『人口問題研究』、第一七〇号、厚生省人口問題研究所、一九八四年四月がある。

（厚生省人口問題研究所・家族社会学）